

『南船北馬集 第一編』にみる井上円了の観光行動

国際観光学部国際観光学科教授

堀 雅通

[要旨]

井上円了は、その生涯に3,578日にも及ぶ全国巡回講演（巡講）を行い、その記録を旅行記（巡講日誌）として公表している。旅行記は、当初、「館主巡回日記」として『哲学館講義録』などに収められていたが、大学を辞してからは『南船北馬集』（全15編）として刊行された。

巡講は前期と後期に分かれる。『南船北馬集』は、国民道德の向上を目的とした修身教会運動のための第二期（後期）巡講（明治39年4月2日～大正8年6月5日）の旅行記である。旅行記にみる巡講は、いずれも「触れ合い」「学び」「遊ぶ」という観光の3要素を備えた「兼観光」（旅行）だった。否、むしろ「観光旅行」そのものだったといってよい。本論は、そのような井上円了の観光旅行・観光行動を『南船北馬集 第一編』にさぐり、これを分析・考察したものである。

『南船北馬集』は、（前期巡講日誌の）「館主巡回日記」に比較し、その分量が圧倒的に多くなる。内容もバラエティに富む。円了は様々な事物・風物に関心を寄せ、それを記録する。各地の景観美が円了の心を捉えた。行く先々で、心にとまった風景、関心をもった事物・事柄の印象や所感を直截簡明に記していった。そこには強い好奇心と「学び」の姿勢があった。同時に「遊び」もあり、「楽しみ」もあった。また旅先での交流・交遊を通して多彩な人的ネットワークを形成した。これもまた「楽しみ」の一つとなっていた。このような巡講（旅行）によって、円了は、広い視野と相対的なものの見方、考え方を身につけた。それは円了の比較文化・文明論、さらには思想形成にも影響を与えている。

[キーワード]

井上円了、全国巡回講演、『南船北馬集』、観光、観光行動

[目次]

1. はじめに
2. 全国巡回講演にみる観光的要素
3. 『南船北馬集 第一編』の書誌
4. 『南船北馬集 第一編』紀行文の概要
 4. 1 大和紀行
 4. 2 足尾および長岡紀行
 4. 3 香川県紀行
 4. 4 長崎県紀行
 4. 5 沖縄県紀行
 4. 6 鹿児島県紀行
5. 「観光旅行」としての全国巡回講演
6. むすび—「旅する哲学者、井上円了」—

1. はじめに

井上円了は、その生涯に、国内外、実に多くの旅行をし、そのつど旅行記を著わしている。円了の旅行は、国内については、哲学館（大学）、哲学堂創設の資金を集めるための、また修身教会運動のための講演旅行、いわゆる「全国巡回講演（巡講）」であり、海外については、世界各国の政治・宗教・教育制度等の視察旅行だった。旅行記をみる限り、いずれの旅行でも円了は行く先々で「観光」を楽しんでいる。そのような円了の旅行は「楽しみを兼ねる商用旅行」、すなわち「兼観光」（旅行）だった¹⁾。

ちなみに、観光は、「触れ合い」「学び」「遊ぶ」という3つの要素からなる。このような要素を備えた旅行として、「漫遊」「遊観」「遊覧」「交遊」などがある。こうした旅行にはいずれも「楽しみ」がある。本論は「観光」を「楽しみのための旅行」(travelling for pleasure)と定義する。「観光」は「観光旅行」のことであり、「観光行動」と言い換えることもできる²⁾。

観光が主体ともいうべき円了の講演旅行は、円了自身、「全国巡回講演」と称しているように、実際、（少なくとも）3,587日を要して全国の市町村を回っている。また当初からそれを目指していた。あしかけ28年に渡って続けられた巡講は前期と後期に分れる。前期は明治23年から明治38年までの15年間、後期は明治39年から大正8年までの13年間である。

巡講を二期に分けるのは、明治39年の円了の哲学館大学からの退隠（引退）である。これを機に前期は哲学館（大学）創設との関係から、後期は修身教会運動および哲学堂創設との関係から巡講の目的が区分される。このことは、巡講日誌が、前期は「館主巡回日記」、後期は当初は「紀行」、大正改元以降は「巡講日誌」と改められたことからもうかがえる³⁾。

いうまでもなく、巡講は、社会教育者・井上円了の講演「旅行」であり、業務（ビジネス）「旅行」である。が、円了自身にとっては、むしろ「観光」旅行としての意味合いが濃かった。すなわち、巡講は、「兼観光」旅行だった。実際、多忙な巡講の合間にあっても、円了は、意図して「観光」を楽しんでいた節がある。「観光」は、超人的ともいえる円了の巡講を側面から牽引した誘引力ともなっていた。巡講に伴う観光行動によって、円了は、広い視野と相対的なものの見方・考え方を身につけた。それは円了の比較文化・文明論、あるいは思想形成にも影響を与えている。

本論は、そのような井上円了の観光行動を、特に『南船北馬集 第一編』にさぐり、これを分析・考察したものである⁴⁾。

2. 全国巡回講演にみる観光的要素

明治23年1月、哲学館（大学）の経営から身を引いた円了は、かねてから懸案であった修身教会運動を展開するため、後期巡講を開始した。『南船北馬集』はその旅行日誌・旅行記（紀行文）である。書名は、南では船に乗って行き、北では馬の背にゆられて旅行く、との趣旨から付けられた⁵⁾。

『南船北馬集 第一編』の発行（初版）は、明治41年12月20日、発行所は修身教会拡張事務所である。『南船北馬集』は全15編からなるが、第16編は、円了没後、遺稿集として刊行された。

ちなみに、前期巡講の「館主巡回日記」は、巡講の日程や行程、天候、面会者や訪問箇所等について、これらをごく簡潔・事務的に記した日誌にすぎない。しかし、注意して読むと、巡講の最中、移動中、あるいは訪問地において、円了は、折に触れ、目にした事物・風物、名所・旧跡等の印象や所感をさりげなく記している。訪問地が温泉であれば、入浴を楽しんだ。また、いずれの地にあっても、実に多くの人々と語り、交流を深めた。これらの行為は「観光」（行動）といえるだろう。「館主巡回日記」は、後半になると、そのような観光的要素が好んで書き加えられるようになっていった⁶⁾。「観光」の合間に講演を行っていたといってもよいほどである。『南船北馬集』は、そのような「館主巡回日記」の特徴を強く受け継ぐものとなった。そこには、大学経営の重圧から解放され、自由な身となった円了の心的状況も反映されているだろう。

『南船北馬集』は「館主巡回日記」に比較し、その分量が圧倒的に多くなる。内容もバラエティに富む。円了は様々な事物・風物に関心を寄せ、それを記録する⁷⁾。旅行記にはそれら事物・事柄の観光的な印象・所感が直截簡明に記される。各地の景観美が円了の心を捉え、いかなる多忙の中にあっても、円了は当地の風光を愛で、見学を行い、見聞を深めた。そこには強い好奇心と「学び」の姿勢があった。同時に「遊び」もあり、「楽しみ」もあった。巡講はまた多くの人々との「触れ合い」、すなわち交遊・交流の場でもあった。実際、

円了はいずれの旅行でも、実に多くの人々と交流を重ね、交友を深めた。そのような旅先での交流・交遊、あるいは交友を通して、円了は多彩な人的ネットワークを形成していった。これもまた「楽しみ」の一つとなっていた。

3. 『南船北馬集 第一編』の書誌

『南船北馬集 第一編』の構成（目次）は以下の通りである。

緒言

大和紀行

足尾および長岡紀行

香川県紀行

長崎県紀行

三十九年度統計

沖縄県紀行

鹿児島県紀行

はしがき（裏表紙）の「緒言」には、「哲学堂主 井上円了肖像」（写真）が掲げられ、哲学館大学退隠の辞を賦した漢詩「哲学館大学退隠之詩」が載っている。続いて「大和紀行」から「鹿児島県紀行」まで、巡講の日程に沿って、主として行政単位（府県別）に当該巡講地の日誌、すなわち「紀行」文が編纂されている。「紀行」文は行政単位で区切られているが、巡講自体は連続して行なわれている（ことが多い）。これはおそらく行政単位の巡講ごとに帰宅していたら時間的にも経済的にも非効率だと考えたからであろう。そのため、円了は、一旦、巡講に出ると、一ヶ月、二ヶ月、ときには数ヶ月もの間、自宅に戻らなかった⁸⁾。第一編でも、巡講は、香川県 → 長崎県 → 満州・韓国 → 沖縄県 → 鹿児島県 → 宮崎県（第二編）と連続して行われている。

第一編は「大和紀行」（明治39年4月2日～5月23日）から始まる。「大和紀行」といっても、出だしは神奈川県のア野町である。新橋を発車し、相州平塚から腕車（人力車）で神奈川県中郡秦野町（市）に入る。秦野町では修身教会の講話を行った後、哲学館大学出身者が校長を務める秦野女学校の開校式に列席、その後、二宮駅から京都経由で奈良へ向かった。

「足尾および長岡紀行」（明治39年6月13日～26日）は、足尾から帰った翌日、亡父の法要のため、故郷（長岡・浦村）に帰った際の2週間足らずの紀行文である。同窓会などにも出席しているから帰省旅行といってもよい。香川県巡講（明治39年7月8日～8月17日）、長崎県巡講（明治39年8月18日～10月27日）、沖縄県巡講（明治40年1月27日～2月17日）、鹿児島県巡講（明治40年2月18日～3月23日）、さらに宮崎県巡講（明治40年3月23日～5月7日）は連続

して行われている。

第一編の巡講は鹿児島県から宮崎県に移ったところで終わる。したがって巡講日誌の「宮崎県紀行」は『南船北馬集 第二編』への収録となっている。また「長崎県紀行」と「沖縄県紀行」との間に「満韓紀行」（明治39年10月28日～11月29日）があるが、『井上円了選集』には収録されていない。したがって、本論でも「満韓紀行」については取り上げないものとする。

『南船北馬集 第一編』の「緒言」は次のような書き出しで始まる⁹⁾。

明治三十九年一月、余がかつて二十年間独力経営せる哲学館大学を退隠して以来、教育勅語の聖意を開達普及するの目的をもつて唱道せる修身教会の旨趣を拡張せんと欲し、全国周遊の途に上り、『東去西来、南船北馬、雲栖霞宿、嘯月吟花』（東にゆき、西より来たり、南では船に乗って行き、北では馬の背にゆられて旅行く。世俗をはなれて雲の湧きたつところにすまいなし、かすみたつところを宿とし、月にうたうたい、花を吟詠す。）の境界を送り、その日々見聞接触せるもの、ここにこれを集録して、『南船北馬集』と名付く。また、随時機に触れ情に感じて吟詠せる駄作も、その良否を問はずことごとくこれを併記す。（12・190）。

続いて、全国巡回講演の目的である修身教会開設の「旨趣」が述べられる。大学経営から退き、精神的に衰弱した身であっても、「修身教会の方だけは、病中といへども従前のごとく微力を尽くさんと欲し、地方有志の所望に応じ」（12・191）、遊説を試みるとの決意が述べられる。

さきに拙者、西洋各国の教育、宗教の現状を視察せんと欲し、前後兩度航西の途に上り、欧米十余国を周遊巡覧して帰朝し、その結果として修身教会の必要を唱道せし以来、各所において続々教会の開設を見るに至れるは、実に欣然に堪へざるなり。爾来精神過労のために、神経衰弱症にかかりたれば、閑地に就きて療養を加へんと欲し、自ら哲学館大学長、京北中学校長および京北幼稚園長を辞し、拙者より財産十三万五千余円を挙げてこれを学校に寄付し、もつて財団法人を組織し、これを他人に一任したるも、修身教会の方だけは、病中といへども従前のごとく微力を尽くさんと欲し、地方有志の所望に応じ、転地療養の心得にてときどき教会拡張の遊説を試み、あはせて学術演説等の依頼に応ずる心算なり。（下略）以上は三十九年一月に起草して各地へ配付せるものなり。

明治四十一年十二月 井上円了誌（12・191）

「緒言」には、「拝読勅語」「吾家古道」「南船北馬」の漢詩3首が載せてある。「拝読勅語」は修身教会運動の基本理念である「教育勅語」の重要性を説き、「吾家古道」は自宅庭園（おそらく哲学堂公園）の風情を謳っている。「南船北馬」は書名でもあるが、巡講に奔走するわが身の境涯を「南船北馬」に喩えていた。そこには、生来、旅を続け、またこれからも旅を続けようとの思いが滲む。人生は「旅」にたとえられるが、実際、円了の人生はまさに旅の連続だった。

4. 『南船北馬集 第一編』紀行文の概要

以下、『南船北馬集 第一編』の紀行文（巡講日誌）について、その概要をまとめる¹⁰⁾。

4. 1 大和紀行

「大和紀行」は、明治39年4月2日から5月21までの45日間の巡講日誌である。ただし、大和（吉野・奈良）へ旅立つ前、円了は、神奈川県中郡秦野町（市）に寄っている¹¹⁾。

4月2日、午後、新橋を発車する¹²⁾。平塚で（鉄道を）下車し、腕車（人力車）に乗り換え、秦野町に向かった。「この日や風和し気朗らかにして、花笑ひ、蝶舞ひ、菜花すでに香を送りきたる」（12・193）。こうした冒頭の一節は円了の心を表わしているだろう。大学経営の重圧から解放された気持ちが素直に表現されたものと思う¹³⁾。車窓に映じたのどかな春の風景、花を愛でる心境を詠った漢詩である。以後、（あまり上手とはいえない）漢詩は随所に登場する。

秦野町の宿坊は天台宗城光院。到着後、ただちに修身教会の講演を行う。聴衆300人。秦野町は、当時、人口1万、戸数2千、タバコの産地として知られていた。

翌日は秦野女学校の開校式に列席。校長は哲学館大学出身。4日、タバコ専売場内を一覧。午後、二宮駅から「西行の途」（12・194）に就いた。途中、車内で哲学館大学出身者に会う。京都の中学校に赴任するという。「午後、二宮駅に至りて乗車し、西行の途に上る。車中、哲学館大学出身鈴木智弁氏に相会す。氏は京都東寺中学林に赴任すといふ」（12・194）。

4月5日、午前6時、京都着。休憩し、奈良に向かう。「仏法の苗」を植えるため、吉野山の奥に入るとの漢詩を詠む。6日、午前2時、今井町（橿原市）に到着、称念寺に投宿する。

6日午前、畝傍御陵と橿原宮を参拝。午後、称念寺で宗教と教育の関係について講演。7日、三輪町（桜井市）に移り、同郡教育会の依頼に応じ、演説を行った。会場は天理教会堂、宿舎は「平素信仏の志厚」（12・194）い医師宅だった。

8日、長谷寺豊山派管長に面会。長谷寺を辞して後、桜井駅（前）皆花楼に宿をとる。9日、多武峰に登ろうとしたが、雨のため中止。終日、宿で疲れをとった。哲学館出身者が訪ねてきた。

10日、吉野郡に入る。「道険にして泥深し。人車進むを得ず、犬馬の力をかりてやうやく

進行す」(12・195)という有様だった。「馬の先引きは、今回はじめてこれを見る」(12・195)。

「郡内に入る所に桜峠あり。その実、桜花なし。よつて戯れに『桜阪とはいふものの花はなし、吉野の山のゲート(gate)なれども』とうそぶきつつ」(12・195)、高見村(吉野町)に入る。14日、上市町(吉野町)に到着。香月楼で休憩、有志家宅に移る。そこで楼上の眺望を賞賛。季節柄、(吉野の)桜を観ることはかなわなかった。その恨みがにじむ。17日、雨の中、歩行して松山町に入り、さらに車行して榛原町に入る。「鳥見岡の旧址の存する所」(12・200)だった。

21日、新子から溪行二里、川上村字大滝に至る。吉野川溪流にかかる大滝(大瀑布)を見る。「対岸の風光ことに佳なり。これ、吉野山中奇勝の一ならん」(12・202)と景勝を愛でる。宿坊は竜泉寺、住職は修身教会の旨趣に深く賛同した人だった。

25日、朝、白屋を発し、迫および大滝に休憩。途中、蜻蛉滝を一見する。「一帯の溪流は吉野川の源流にして、兩岸の風光自然に武陵桃源の趣あり」(12・204)と感じ入る。宿泊した芳山館の後庭・藤尾坂は義経・静決別の地だった。

峻坂險路を登攀、「兩岸は天然の岩石より成る。往々碧流かかりて飛瀑となり、激して白雪を現ず。しかして対岸は絶壁千仞、天空をつきて屏立す。実に仙郷なり」(12・208)。

心を洗うほど清い吉野川の溪流美を鑑賞しつつ旅を続ける。また、この辺りの婦人が、「一種異様の袴をうがち、重荷を負ひて峻坂を上下す。婦人、普通十五貫目ないし二十五貫目を担ふといふ。その労力驚くべし」(12・208)と感心する。

深山溪谷の旅の最中、地震に遭った。「途中強震に会し、山上の小石の落下せるを見る」(12・209)。宗檜村(西吉野村)の民家で後醍醐天皇の行在所および宝物を拝観。五條町(五條市)の桜井寺では、維新前、吉野山中を震撼させた天誅組の顛末を聞いた。二階堂村(天理市)では、楠正成籠城の遺跡を訪ね、漢詩を詠んだ。

ちなみに、円了は、女性に対する関心が薄かった¹⁴⁾。また食に対する関心も薄かったが、17日、掖上村(御所市)玉手の満願寺に移った際、大和路の名物・茶粥の馳走に預かった。満願寺で金剛山一帯の峰々を眺望した後、翌18日、玉手を出て、御所から乗車、香久山村(橿原市・桜井市)に移り、大和三山(香久山・畝傍山・耳成山)を遠望した。

以上で大和の巡講は終わる。19日、奈良駅にて4月9日から40日間、同行してくれた上田晃覚氏に別れを告げ、京都へ向かった。午後12時、京都着。市役所議事堂において講演後、晚餐の饗応にあずかった。

20日、京華看病婦学校、妙満寺で講演。会場は「満堂の群聚を得た」(12・216)る盛況だった。京都には、22日まで滞在。その間、第三高等学校仏教青年会、常葉青年会、常葉婦人会、京華校友会、妙満寺、大覚青年会、九条東寺真言宗連合中学、大谷派別院、大谷派婦人法話会での講演を次々と精力的にこなしていった。いずれの会場も「聴衆、堂にあふれ、庭

前また人をもつて埋ずむるに至る」(12・215～216)ほどの盛況だった。また、哲学館大学および京北中学校出身者、あるいはかつての学友(文学士)と7年ぶりに再会する機会ともなった。

既述したように、巡講中、円了は各地で哲学館大学、京北中学校卒業生の献身的な世話を受ける。「今回の旅行は日数五十余日にして、大和にあること四十余日、吉野郡内にあること三十日間なり。・・・この旅行中において、各所ともに有志諸氏の優待に接し、厚意をになふこと一方ならず。これ、余の深く感謝するところなり」(12・217)との言葉で、「大和紀行」を結んだ。20日に帰京した円了は、早速、「和田山哲学堂」に参り、「四聖に向かひて無事帰京を奉告し」(12・216)、七言絶句一首を得た。

4. 2 足尾および長岡紀行

明治39年6月13日、「朝、雨をおかして東京を發し、日光を経て足尾にむかふ」(12・218)。細尾に一泊、翌朝、「緑陰を踏みて峻嶺を攀じ、溪行数里、鐵路に駕し、一走して足尾町に入」(12・218)った。旅館は間藤町暢和館、会場は大谷派説教所だった。

足尾に2日滞在。鉾山場内を見学、壮大な精鍊装置に驚く。精鍊場では鑠金の実況を目の当たりにし、「地獄の活劇をみるがごとき心地」(12・218)がした。ただ、「鉾気異臭を放ち、鼻をつき喉を裂かんとせる」(12・218)には閉口する。足尾では鉾山事務員諸氏の依頼に応じ、妖怪の談話も行った。17日、「晴れに乗じて足尾を發し、帰京の途に」(12・219)就いた。

18日、越後行きの準備をし、19日、長野善光寺に一泊、20日、21日と郷里の浦村で亡父の十三回忌法要を営む。実家で一日休んだ後、23日、長岡に移り、午前は高等女学校、午後は母校・長岡中学校で修身上の講演を行った。夕方は地元関係者の歓迎会に出席、「長岡館において当地有志諸君の發起にかかる歓迎会に出席し、意外の厚遇をかたじけのうせるは深く感謝するところなり」(12・219)。

「長岡中学校は余の出身の地にして、今を去ること三十四、五年前、余がその校にありて創立せる和同会が今日なほ持続すといふ。同会の依頼に応じて所感を演述す。午後、来迎寺村(越路町)に帰り、高橋九郎氏の宅において更に講話をなす。余の出産の地は来迎寺村大字浦なり。甫水の号は浦の字より起こる」(12・220)。そして、「有志諸氏の優待厚遇をかたじけのうせるは、余の感喜にたへざるところなり」(12・220)と、改めて謝意を記し、「足尾および長岡紀行」を結んだ。

4. 3 香川県紀行

明治39年7月8日、午後、新橋を發車、香川県巡講を開始する。9日午前、岡山着。岡山で哲学館大学出身者青木了栄氏と相会。氏とともに汽船に乗り、薄暮、高松に向かう。高松到

着。有志数十名の歓迎を受ける。可祝楼に宿をとる。

翌日、「午後、興正寺派別院に開会す。仏教研究会の主催なり。聴衆満堂、およそ千名ありと称す」(12・221)ほどの盛況だった。

11日、県庁に出頭、知事に面会。高松では蚊が気になった。「高松は蚊の名所なりとて、昼夜ともに蚊に攻めら」(12・222)れた。そこで「蚊川(=香川)なる多蚊松(=高松)町の蚊祝楼(=可祝楼)、蚊に攻めらるるも道理なりけり」(12・222)と戯れの歌を作った。

13日、志度町、14日、三本松町(大内町)、津田琴林を経た後、長尾村(長尾町)、氷上村(三木町)、池戸村(三木町)、仏生山町(高松市)、山田村(綾上町)、中笠居村(高松市)と巡り、21日、丸亀市に入る。丸亀中学校で講演、善竜寺に宿をとった。

24日、坂出町(坂出市)の教専寺に移り、ここを宿所とした。昼は蝉、夜は蛙の声を耳にする。26日、炎暑の中、汽車にて琴平町に移動、霞におおわれた象頭山を見て漢詩を詠んだ。その後、多度津町を経て、善通寺町に移る。「宿坊は善通寺誕生院にして、弘法大師誕生之地」(12・227)。29日、丸亀城内にて丸亀歩兵十二連隊に講演を行う。

8月1日から5日まで再び高松市で講演をこなす。その間、栗林公園での茶話会に出席。6日、津田町に移る。「日暮、琴林砂上において晚餐を供せられ、すこぶる清快を覚」(12・229)え、漢詩を詠み、人口美に対する自然美を賞賛した。「天成美術勝人工」(12・229)。

7日、高松村(高松市)に入る。屋島寺が宿坊。村長の案内にて屋島山に登る。そこでの眺望を「讃州第一」と絶賛する。

11日、観音寺町(市)に入り、翌12日、朝、琴弾公園を一周、その風光を「佳絶」と称す。13日、大雨をおかし、車行八里、詫間村(詫間町)に入る。夜の九時だった。詫間村は栗島と相對し、風光に富む。「その景は香港に似たるどころあり」(12・233)との印象を記す。栗島の山上に半円の月が出ていた。

15日、高松から汽船で小豆島に渡る。16日、寒霞溪のふもとにある草壁村(内海町)に移り、溪上を遊覧後、講演。奇岩景勝の寒霞溪。円了は、これを耶馬溪も及ばぬほどの「風光絶」と賛美する。17日、余島に移り、大森氏の別荘にて小憩、桃の木でいっぱいの同氏の庭を觀て「小詩を賦」(12・234)した。

18日、37日間に及んだ讃岐の旅を終え、午後5時、長崎に到着。紀行文の末尾に以下の所感を綴って「香川県紀行」の結びとした。

「香川県は地味、氣候ともに佳良なれば、物産比較的に多く、人口また稠密に過ぐ。……民家の富裕なるものは居宅、庭園を美にする風あるも、夜具、蒲団は粗なるもの多し。郡部に入りては旅館の佳なるものなきは、旅行者の不便を感じるところなり」(12・235～236)と、旅行者としての不満を述べるが、「風景にいたりては大いに誇るべきものあり。余は屋島の勝をもつて第一にかぞへんとす。その次は琴平、そのつぎは観音寺、そのつぎは詫間、そのつぎは津田ならんか。奇勝においては寒霞溪あり、庭園としては栗林あり、ともに天下

の名勝とするに足る」(12・236)。

4. 4 長崎県紀行

明治39年8月18日、午後4時、長崎着。有志数十名の出迎えを受ける。宿所は西川楼。哲学館出身者2名に相会する。うち1名が長崎県の随行を約す。

19日から25日まで一週間、仏教哲学と妖怪総論の講義を行う。長崎市仏教青年会の依頼による。会場は研屋町女児小学校、夜は光永寺にて公開講義を行う。講習中は連日の炎暑で暑気耐え難かった。

長崎一帯は寺社が破壊される歴史もあったが、維新後の今日、自分(=円了)は自然のパノラマの中にあるとの感慨を漢詩に詠む。翌26日、「晴れ。長崎客舎を発し、日見嶺をこへ、矢上村(長崎市)に至」(12・238)り、教宗寺で講演する。28日、矢上村内に「観音の瀑布あるを聞き、腕車に駕してこれに遊」(12・238)び、夏の暑熱を忘れた。

長崎では哲学館出身の有馬憲文氏が巡講中の世話をやいてくれた。詩文を良くした文化人で漢詩を贈答し合う。有馬氏は、正覚寺の住職で、寺院内に修身教会臨時事務所を置いていた。

29日、諫早町(諫早市)に移り、北高来郡教育会の依頼で講演した後、長崎に戻る。宿坊は正覚寺。30日、「長崎市の学士会の寵招を得て、内外倶楽部の晚餐会に出席」(12・239)。ここで控訴院長西川鉄二郎氏、隈本有尚氏らに会う。ちなみに隈本氏は「哲学館事件」の最重要人物だった¹⁵⁾。

31日、汽車にて佐世保(市)に移る。9月1日まで佐世保に滞在、市内をゆっくり見物した(と思われる)。漢詩5首を得る。宿所は佐世保の浦に近い教法寺。3日は、満月、「観月の小宴を擬す」(12・240)。

4日、汽車で伊万里に移り、そこから和船で福島村(町)に至る。宿坊は尊光寺。6日まで福島に滞在。5日、「夜に入りて天やうやく晴れ、明月輝を流し、羽化登仙の趣あり」(12・241)。6日は哲学館出身の福寿寺住職井手覚乗氏の世話になる。「寺は海に面して以呂波嶼と相對す。青巒四十七個ありて波上に浮かぶ。小松島の観あり」(12・241)。

7日、汽船に駕して志佐村(松浦市)に移る。旅館に泊まる。講演会場は円成寺。9日まで志佐に滞在、「小学児童のために演述す」(12・242)。

10日、世知原村(町)を経て佐々村(町)に移る。「この間(世知原～佐々)、石炭輸送のために鉄道を架す。会社の好意により、炭車に便乗するを得たり。佐々の会場は東光寺なり。住職は徳光松隆氏にして、詩書をよくす」(12・242)とのことで、漢詩2首を氏に贈った。

11日、山口村(佐世保市)字相ノ浦に移る。宿所は旅館。哲学館出身の洪徳寺住職山本祖学氏の主催で同寺にて開会。翌12日は恵比寿島に遊ぶ。「四面の風光、あたかも能州の九十

九湾に類す。ここより平戸に至るの間に九十九島ありといふ。鎮西松島の称あり」(12・243)。

13日、大村(市)に入り、その後、愛野村(町)、瀬戸村(大瀬戸町)と巡講を続け、17日、長崎に帰航した。この間、酒も肴も旨かったが、ただ中秋の季節だというのに朝夕蚊がいたことは残念だったと記す。

18日、県庁へ赴き、知事に挨拶。医学専門校学生同士の会の依頼で講演する。19日、茂木港から汽船(火輪船)に乗って、島原町(市)に行く。「当所は湾内の風景最も秀美にして、小嶼並列し、その間に大小の船舶滞泊す。水清く山みどりに、前に有明の浦あり、後ろに温泉ヶ岳あり。岳の前に起立せるものを前山または眉山と名付く。この山、今より二百年前噴火崩壊して、海中に数個の小島を出現するに至れりといふ」(12・246)。「天草洋と有明浦とは古来、不知火の怪あるをもつてその名を知らる。……余、一夕、二時に客舎を出でて、海浜に至り天明まで待ちしも、ついに不知火を見ることを得ざりしは遺憾なり」(12・247)。好奇心旺盛な円了、しかも自分が最も関心ある不思議現象の「不知火」はぜひとも見たかったにちがいない。

22日、島原港から汽船で堂崎村(有明町)に移る。「宿所は称名寺なり。天草洋を眼下に見、肥後山を面前に望み、堂内、庭前ともに風光明媚なるは他に多く見ざるところなり。即時、詩編をもつてその一端を写す」(12・248)。24日、宿坊専念寺の「庭内に蘇鉄と蛇盆(ザボン)の大なるものあるを見て、一律を賦す」(12・249)。慶應義塾教官の住職井沢道暉氏は不在だった。

26日、南高来郡口之津村(町)に移る。「本郡は島原半島と称し、中央に温泉岳あり。周辺に海をめぐらし、海岸にそひて村落あり。一条の車道これを貫通し、その平らなること、といしのごとし。これに加ふるに、山海の風光いたるところ明媚を極め、車上実に壮快を覚ゆ。ことに収穫の時節に当たり、満野の黄稻を見るもまた一興なり」(12・250)と、車窓風景を漢詩に詠む。

29日、加津佐から口之津に戻って乗船、茂木に帰航する。船中にて島原半島の風月(愛宕山にかかる弓張月)と南船北馬の身にある自らの胸中を漢詩に詠んだ。「茂木港より腕車を駆り、午後四時、長崎正覚寺に入る。当夜、庭前の月に対して吟賞す」(12・252)。五律を賦して正覚寺山主に贈った。

30日、「快晴。有馬氏、山遊を試みんと欲して余にはかる。余、大いにこれを賛し、吟友田中澄太郎氏(医師)を誘ひ、瓢酒簞食を携へ、山行半里ばかりにして、八景峰頂に達す。松樹の下に席を設く。湾内湾外の風光、点々指摘すべし。余、まず五律を得たり。……八景峰とは余の命名するところなり。当夕、月を踏みて寺に帰る。近来の清遊を極む」(12・252～253)夜となった。

八景峰の山登りを楽しんだ円了は、その夜10時、壱岐に向かう。「便船に駕して壱岐国に

渡る。海上平静なり」(12・253)。

10月1日、壱岐郷之浦に入港。哲学館出身者市山氏の出迎えを受け、小憩し、沼津村（郷ノ浦町）へ向かう。宿所兼会場は高源院。住職は哲学館出身の浦川賢竜氏。2日、「沼津を発し、草鞋をうがち、石径泥路を攀じて那賀村（芦辺町・石田町）に移る。……途上、鬼窟をみる。けだし穴居または墳墓ならん」(12・254)。円了は珍しい事物には必ず関心を寄せた。

ここで以下のような感想を記す。「当夕はあたかも旧八月十六日夜にして、夜に入りて雲やうやく晴れ、清光天に満ち、月華座に入る。かかる絶海の孤島にありて、中秋の観月をなすは、実に不思議の因縁といはざるを得ず。去月は福島の高角にありて明月を望み、本月は壱州の仙源にありて中秋に会するもまた奇遇なり」(12・255)。

円了は、壱岐の風景、地勢がイギリスやオランダに似ていると漢詩に詠む。「四面無山眼界寛、林丘起伏似英蘭……」(12・256)。

6日、朝8時、長崎に戻る。その夜10時、五島に向けて出航。翌7日、午前10時、福江村（市）に着く。「七日（日曜） 晴れ。午前九時、福江着。郡役所、村役場、中学校職員諸氏に迎へられて旅館に入る。会場は宗念寺なり。……当村は旧五島藩の城下なり。……八日晴れ。午前、中学校に至りて演説し、午後、郡視学永石密蔵氏とともに富江に移る。富江より大浜まで一里半の間、人車通ず。その他には郡内いずれに至るも車道なしといふ。大浜より海上二里、舟行して富江に着す」(12・257)。

9日、午後、「馬上にて険路を攀じ、行くこと五里、馬驚くこと数回、夜に入りて岐宿村（町）に着す。宿所は西村力之助氏の宅にして、会場は全福寺なり。当地富豪西村団右衛門氏、および役場諸氏の発起なり。郡書記藤原重任氏、諸事を斡旋せらる」(12・258)。

10日は、「風邪にかかりて平臥し」(12・258)、漢詩を賦して、旅情を慰めた。11日、この辺りの民家の多くが板屋根に石を載せていることに気づく。「あたかもわが郷里なる越後の町家を見るがごとし」(12・258～259)。また五島の地勢がスコットランドに似ていると漢詩に詠んだ。「海繞四辺眼界寛、山河形勢似蘇蘭……」(12・260)。

12日、午後3時半、乗船。夜12時、長崎に帰航。午前1時、正覚寺に入る。14日、午前中、師範学校と商業学校で演説、午後は正覚寺婦人会で講話をなす。また、その夜、有馬氏より送別の饗応に預かった。有馬氏、田中桂南氏と漢詩を贈答し合う。残念なのは、「十月なほ蚊の人を襲ふ」(12・262) ことだった。蚊の存在に円了は神経質だった。

16日、朝8時、正覚寺を発し、平戸に向けて乗船、大勢の見送りを受ける。長崎巡講では、とりわけ有馬憲文氏の世話になった。見送りに際し、氏は佐世保まで同船してくれた。「かつ（有馬）氏は、六月以来本県下巡回の件に関し、各所交渉の中枢に当たり、また、巡回中は毎回氏の宅をもつて寓居に当てられ、一方ならざる厚意をかたじけのうせるは、ここに深く感謝するところなり」(12・262～263) と心からの謝意を表わした。

9時、出航。3時、佐世保に寄港。有馬氏と襟を分かち、4時間かけて平戸町（市）に移動・着岸。十余名の歓迎を受けた。宿所は当所第一の巨刹誓願寺である。翌17日から発起者に挨拶回りをし、各寺院で演説を行った。多くの聴講者があった。

18日、平戸を発し、田助に行く船を待つ。19日、午前3時、乗船。8時、武生水村郷之浦に着く。壱岐では石田村（町）、香椎村（勝本町）で講演を行う。22日から風雨激しく、船が出ず、足止めを食った。「二十四日 暴風雨。終日船を待つも、入港せず。座臥の間、数首を得たり」（12・265）。

25日、快晴。未明、汽船が入港。直ちに旅装を整え、対馬に向かう。午前11時、対馬厳原（町）に入港。多くの出迎え受け、宿坊の光清寺に入った。その夜、国分寺において開会、「聴衆、堂に満つ」（12・266）盛況だった。「厳原は山水明媚にして、前に厳原湾あり、後ろに有明山あり」（12・266）。

海に沿って連なる岩石の多い険しい山がある対馬について、円了は、壱岐、五島との比較から、次のように記した。

「対州は、これを壱州に比するに山高く溪深し、これを五島に比すれば樹木鬱葱たり。これ、対州の風景の壱岐、五島よりも秀霊なるゆえんなり」（12・267）。

27日、厳原を発して鶏知村（美津島町）に移る。途上一首をしたため、以下の所感を記して、60日に及んだ長崎巡講の旅を締めくくった¹⁶⁾。

対州は壱州と同じく、シナ、朝鮮の風に似たところあるも、忠君愛国の義気に富めるは、清韓人と雲泥の差あり。宗教は祖先教といふべく、祖先の霊位を崇重すること厚し。その地、高山峻嶺多く、したがって耕地に乏しく、米穀を産せず。故に民家は極めて粗食なりといふ。甘薯を呼びて、孝行芋と名付くるは奇といふべし。余は不幸にして滞在の時日を失ひ、村落民家の風俗を目撃せざりしは遺憾なりとす。（12・268）

4. 5 沖縄県紀行

秋のように衰えたわびしい人情と世情の風波を憂え、仏法の苗を植えようと願った円了は、どこがよいかと思案した。すると、九州のかなたに琉球があることに思い至り、一詩をしたため、明治40年1月27日、午後、沖縄へ向けて出航した。

28日午前10時、大阪港川口にて商船会社汽船平壤丸に搭乗、正午解纜。神戸を経て鹿児島へ直航。30日午後、（鹿児島）寄港。諸氏数名の来訪ある。「この日、風寒く山白く、間、雪片の空間に舞ふを見る。終日船室にありて陸に上らず」（12・274）。

「三十一日正午、鹿児島出帆、沖縄に向かひて航行す。海上、風波高し」（12・274）。

2月1日、午後、（奄美）大島に寄港する。名瀬湾に繫留すること5時間、沖縄本島へ向けて出港する。2日、勁風高浪をおかして、午前十時、沖縄県那覇港に入る。「県属仲本政世氏、

余を迎へて船中に至る。氏の案内にて上陸す。港内風波いまだ収まらず、男爵奈良原知事をはじめとし、県官紳士数十名、埠頭にて歓迎せらる。旅館は浅田屋なり」(12・274～275)。

2月だというのに沖縄では夜中に蚊の声を聞いた。3日、午後、沖縄県教育会の依頼に応じ、那覇区内松山小学校にて講演。聴衆満堂、非常の盛会だった。なお奈良原知事とは、ロンドン及びローマで初めて会い、爾来、二十年を経て再会した間柄だった。

4日から14日まで沖縄各所で講演する。6日、知人宅で琉球料理の饗応に接する。ここで、琉球の風俗、習慣、事物などについての所感を記す。「婦人はみな荷物を頭上にいただく。その歩すること走るがごとし。たまたま豚の児を頭上に乗せて行くを見るは奇観なり。男女はおおむねはだしにして、草鞋を用ひず。常食は薩摩薯にして、これを唐薯と称す。泡盛焼酎をたしなむ。その多量なるは、一時に五合を傾くといふ。豆腐を食することまた多し。市中に豆腐屋と線香屋の多きは他県に見ざるところなり。線香は毎戸祖先の霊を祭るに用ひ、各家必ず霊壇を設けて、累代の位牌を安置し、毎日拝礼をなす。夜に入りて恩納に着し、民家を借りて宿す。蚊を払ひ、まず泡盛を傾けて疲労をいやす。ときに雨はなはだしく至る」(12・280)。

15日、便船京城丸にて沖縄を出航。午後5時乗船、諸氏の見送りを受け、6時、抜錨。翌16日午後、(奄美)大島名瀬に寄港。午後3時、出港。「夜に入りて風力その度を高め、船したがって進まず。鯨波船を越えて走ること数次、客みな船病に苦しむ。翌十七日、風波ますます高く、終日激浪の間に漂蕩し、当夜二時やうやく鹿児島に着岸し、翌朝を待ちて上陸す」(12・283)。

こうしておよそ2週間に及んだ沖縄での巡講を終え、鹿児島県に入った。沖縄巡講を終えるに当たり、円了は、「沖縄県は言語、風俗、人情ともに今なほ他府県と大いに異なるところありて、朝鮮、満州を旅行するがごとき感あり」(12・284～285)との書き出しで、以下のような幾分詳しい所感を記した。これが、後日、筆禍事件に発展した¹⁷⁾。

沖縄県は地味といひ気候といひ、誠に申し分なき天幸を得たる地といふべし。しかし人民の生活程度を見るに、那覇、首里を除くの外は、すこぶる劣等に位せるもののごとし。その原因種々あるべきも、天幸に安んじて奮発心を欠けるは、その主因なるべし。また、気候の影響が人をして懦弱ならしむるも一原因なるべし。他地方と交通の不便なるより、なにごとにも刺激なく競争なきも一原因なるべし。井蛙の見を有し、他府県の実況を目撃したることなきも一原因なるべし。よつてその氣質を改変するには、学校教育はもちろん、学校卒業後にもときどき訓誡を与へ、忍耐、奮励、勤儉、貯蓄の気風を起こさしめざるべからず。

沖縄は従来その国固有の歴史を有したるをもつて、忠君愛国の精神において大いに欠くところあるがごとく感ぜり。儒教の感化によりて、孝道を重んじ、祖先を敬するこ

とを知るも、国家の觀念に至りてははなはだ乏しきを覚ゆ。故にこの点は同県の教育の任をになふものの、大いに注意して訓誡せざるをえざるところなり。また、学校卒業後といへども、ときどき勅語の聖旨を敷衍して訓示するを要するなり。これ、余が修身教会の設立は沖縄県において殊更にその急要を感じたるゆえなり。

沖縄県は一言をもつていへば、蓬萊仙境なり、武陵桃源なり。年中春夏二期のみありて秋冬の二節なく、緑葉紅花四時たへず、嚴寒なほ春のごとく、米穀は二度三度の収穫を見るべく、人情もまた質朴にして、太古の風あり。実に天然の美国といふべし。ただ、その人民の迷信に陥り、遊惰に傾き、氣概に乏しく、文明の空氣に触れざるもの多きは、玉にきずあるがごとし。以上、いささか卑見を添へて琉球紀行を結ぶ。(12・285～286)

4. 6 鹿児島県紀行

明治40年2月18日、午前2時、鹿児島に入港。午前8時、上陸。多くの関係者の出迎えを受けた。

午後1時、鹿児島郡視学衛藤助治氏とともに馬車で谷山村（鹿児島市）に向かう。哲学館出身者秦法顕氏が随行した。「この日、春晴れ、夜来の風波やうやく収まり、桜岳薩海の風光あたかも眉間を照らすのごとく覚ゆ。途上、七絶二首を得たり」(12・287)。

19日、千頭知事の宅を訪れたが、あいにく上京中で不在だった。その帰途、第七高等学校長及び事務官の自宅を訪ねる。また、「浄光明台に登りて西郷南洲翁の墳墓に拝詣す。その地、市街を下瞰し、桜島に対向す。実に薩州第一の勝景なり。・・・余、ときに所感を（漢詩に）賦す」(12・288)。

20日、妙行寺で講演。その日、哲学館大学卒業者の訃報に接し、弔詩を賦して贈る。21日、指宿村（市）に移って講演。会場は興正寺派寺院、宿所は旅館だった。「その地、海門（開聞）山に近く、池田湖に接し、いたるところ温泉多し。・・・二十二日 風雨、往々雪を飛ばす。寒をつきて鹿児島市に帰る。車行十一里なり。途上、一詩を得たり」(12・289～290)。

「二十三日 晴れ。午前、高等女学校に至り、生徒のため演説す。校長渋谷寛氏は元福井県視学官たりしときより面識あり。午後、大谷派別院にて発会せる仏教青年会にて演説す。聴衆満堂の盛會を得たり。余、拙作をもつて祝詞に代ふ」(12・290)。そして、鹿児島市、鹿児島城についての私見を述べる。

鹿児島市は風光殊絶、鎮西勝景の一に加へて可なり。城山に登りて桜島と相對する所、呼べばまさに答へんとする趣ありて、なにびとも快哉を呼ばざるはなし。・・・徳川時代の大名の居城中、臈城（鹿児島城）のごとき勝地はまれに見るところなり。余は

江州彦根の居城と、肥前唐津の居城と、麿城との三者をもつて旧城中の三勝となさんとす。しかして風景の雄壮なるは麿城をもつて第一となす。従来、薩州に多く偉大なる人物を出だせるは、この風景あずかりて力ありしとは、余の憶測なり。(12・292~293)

27日、朝9時、宿坊を発し、終日馬車に駕し、出水郡に向かう。行程十八里。川内向田町で日暮れとなる。阿久根の旅館に到着したのは、夜11時だった。「疲労はなはだし」(12・294)と、円了にしては、珍しく疲れを訴えた。

阿久根村(市)、上出水村(出水市)、下出水村(阿久根市)、上東郷村(東郷町)、隅之城村(川内市)、入来村(町)、佐志村(宮之城町)、横川村(町)、大口村(市)、東太良村(菱刈町)、国分村(市)、加治木村(町)、桜島村(町)、伊作村(吹上町)、阿多村(金峰町)、東加世田村(加世田市)、加世田村(加世田市)、東南方村(枕崎市)、川辺村(町)、知覧村(町)、小根占村(根占町・田代町)、垂水村(市)、花岡村(鹿屋市)、鹿屋村(市)、大崎村(町)、東志布志村(志布志町)、松山村(町)と巡り、3月23日、宮崎県に入る。

連日の強行軍だったが、18日、小根占村では海が荒れたため、途中で山川港に引き返した後、指宿村字十二町に向かわざるをえなかった。そのため予定の肝属郡花岡村(鹿屋市)での講演ができなかった。とはいえ、「不幸かへつて幸いとなり、半日温泉に浴して休養する」(12・301)こととなった。「鹿児島県紀行」を終えるにあたり、次のような所感を記す。

鹿児島県は日本国中、一種特別の国と称して可なり。言語、風俗、人情とも、大いに異なるところあり。言語にその県の語と普通語との二種の別を設くるは沖縄県に同じ。普通語とは日本普通の語の意味にて、小学校にて用ふる語をいふ。風俗、人情に関してはあるいは粗野の評を免れ難きも、淳良質素の風に富めるは、大いに称揚せざるを得ず。しかしてその性質は美術の思想、技芸の才能に乏しく、感覚の敏穎を欠くがごとき風あるも、山はおのずから崔嵬、人はおのずから雄大なるの趣ありて、勇壮快達はその長所たり。換言すれば、軍人風にして実業的にあらず、また、士族と平民との懸隔のはなはだしきは他府県に見ざるところなり。

教育に至りては内容のいかんは推測し難きも、中等教育の志望者のおびただしきと、学校設備の往々壮大なるものあるとは、人をして驚かしむ。・・・真宗ひとり全勢力を占有す。これ、数百年間真宗はヤソ教と同様に厳禁せられし反動なりといふ。・・・民間の迷信の比較的少なきも、真宗隆盛の結果なるべし。

鹿児島県人の気風を一括すれば、質朴にして真面目なり。なにごとにも思い切りよく、グズグズせざる風あり。あるいは頑強の気味ありと評するものなきにあらざるも、その強情なところおのずから長所あり。また、ノンキに過ぐる風なきにあらざるも、ハイカラ風、生意気風の少なきは大いに称すべきところなり。かかる美風が今後他県と交通

頻繁なるに至らば、あるいは一変するの恐れなきにあらず。これ、今より修身教会の旨趣を普及して、予防を講ずる必要を感ずるゆえんなり。(12・303～304)

以上が『南船北馬集 第一編』に収められた6つの紀行文(巡講日誌)の概要である。これら紀行文にみる巡講は、観光の3要素(「触れ合い」「学び」「遊ぶ」)を備えた「兼観光」(旅行)であったことがわかる。そして、円了が、そのような「兼観光」(旅行)を心から楽しんでいただことも理解されるだろう。

5. 「観光旅行」としての全国巡回講演

すでに「観光」が「触れ合い」「学び」「遊ぶ」という3要素を含み、それが「楽しみ」となることをもって「観光」と定義したが、この点から、以下、『南船北馬集 第一編』に収められた6つの紀行文における井上円了の観光行動について考察する。

まず「触れ合い」については、巡講中、円了は実に多くの人々と会って交遊・交際を深めている¹⁸⁾。またそれを「楽しみ」としていた。いずれの会場でも、円了の講演は、ほとんど立錫の余地もないほどの満員・盛況だった。「午後、大谷派寺院の発起にて公会堂において演説す。千名以上の聴衆あり」(12・221)。「聴衆満堂、すこぶる盛会なり」(12・215)。「聴衆三百名あり、空前の盛会と称す」(12・193)。

なぜこれほどの聴衆が集まるのか。これには、文部省、県庁をはじめ、教育行政機関、寺院関係者の厚い支援があった(ものと思われる)。「いたるところ歓迎に接し、優待をかたじけのうし、これに加ふるに聴衆満堂、他府県にいまだかつて見ざる盛會を得たるは、主催者の用意周到なると、有志者の篤志熱心なるとによれるは明らかなり」(12・235)。さらに哲学館大学、京北中学校の卒業生たちが円了の巡講を献身的に支えてくれた。「開會主催は住職小山智瑞氏にて、もと哲学館出身たり。聴衆、堂にあふる」(12・232)。「両氏(阿波根氏、岩原氏)は哲学館出身たるのかどをもつて、毎日代はりあつて那覇を往復し、奔走周旋の勞をとられたるは、感謝するところなり」(12・282)。哲学館(大学)卒業生はほとんど全国にいた。「妙行寺に入る。住職井上才智氏は哲学館出身なり」(12・288)。壱岐、対馬、そして沖縄にも卒業生がいた。ある者は、学校教員など教育関係者として、ある者は寺の住職など寺院関係者として、当地で活躍する人々となり、円了を暖かく迎えてくれた。

巡講中、円了は、これら人々との交流・交際に積極的に努め、またそれを「楽しみ」とした。とりわけ哲学館関係者との交流・交際を無上の楽しみとした。彼らが中央よりも地方で活躍している姿を見るのが「楽しみ」だった。「秦野女学校の開校式に列席す。校長は哲学館大学の出身たる高橋光英氏なり」(12・193)。講演・講話後はたいい茶話会、懇親会があった。そこでまた円了は当地の人々と交流を深め、卒業生たちと久闊を叙した。「午後、講習の後、栗林公園において有志の茶和会あり。会するもの百五十名、みな知名の士なり。

余興に音曲あり福引きあり。会終はりて、更に哲学館大学同窓会を開く。出身者および賛成者、三十余名相会す」(12・228)。

「学び」という点では、円了は、巡講中、非常な好奇心をもって多くの事物・風物に接し、いずれも独自の視点からユニークな考察を加えている。当地の民俗・風俗の情報収集にも努め、その成果を『日本周遊奇談』といった著作にもまとめている。紀行文には忌憚のない所感が記され、また鋭い文明批評が(さりげなく)織り込まれる。

「対州は壺州と同じく、シナ、朝鮮の風に似たところあるも、忠君愛国の義気に富めるは、清韓人と雲泥の差あり」(12・268)。ときにそれは「沖縄県紀行」のように物議を醸すこともあった。

一方、いかなる多忙の中にあっても、円了は趣味の世界に遊ぶことを忘れなかった。「矢上村内に観音の瀑布あるを聞き、腕車に駕してこれに遊ぶ」(12・238)。景観鑑賞は第一の趣味、何よりも「楽しみ」であったから、折に触れ、「遊び」の世界に浸った。「天草洋を眼下に見、肥後山を面前に望み、堂内、庭前ともに風光明媚なるは他に多く見ざるところなり。即時、詩編をもつてその一端を写す」(12・248)。

巡講は見知らぬ土地に足を踏み入れること、好奇心旺盛な円了にとって、それは新鮮な驚きと「楽しみ」をもたらしてくれた。一見事務的な記述の中にも円了の観光(的)行動を認めることができる。「会前に渡辺郡視学の案内にて溪上を遊覧す」(12・233)。「会后、安永、入倉両氏の案内にて屋島山に登る。宿坊は屋島寺なり。渦元村長の案内にて山上を一周す。眺望ことに壮絶なり。屋島雑詠は左に録す」(12・230)。

いうまでもなく、修身教会運動、巡講そのものは、あくまでも井上円了個人の事業であって公的な業務ではない。にもかかわらず、円了の巡講に際しては、いずれの地でも実に多くの関係者が円了を支えてくれた。ある者は会場の手配に奔走し、ある者は講演の広報と聴衆の動員に労をとった。留意すべきは、県知事、高等学校長など、公的地位にある当地の錚々たる人々が円了の巡講に与^{あず}かっていたことである。

そのようなことから巡講は半ば公的な性格を強く帯び、また驚くほど多くの聴衆が動員された。したがって巡講は相当程度公的な催物であったことがうかがえる。講演が延期ないし中止となった場合の円了の責任も大きかったろう。

「当日は肝属郡花岡村開演の約なるも、天災の報を発して客棧に臥す」(12・300～301)。あまりの高波のため船が出ず、半日港に滞留、当地に行けず、その結果、講演時間に遅れ、関係者に迷惑をかけることとなった。そこで、「諸氏の厚意をかたじけのうせるは深謝するところなり」(12・266)と恐縮するところだが、「不幸かへつて幸いとなり、半日温泉に浴して休養するを得たり」(12・301)と案外ちゃっかりしたところもあった。

講演を伴わない旅行ならそれはまさに(純然たる)観光旅行だが、公開講演という、なかば公的な業務たる巡講(旅行)は、これを「兼観光」とみなすことに異論はないであろう。

以上、観光の3要素を満たし、公的な性格を強く帯びた巡講は、「兼観光旅行」であったといえる。円了はこれを亡くなるまで続けたのである。

6. むすび— `旅する哲学者、井上円了—

巡講は講演旅行である。しかし、移動の合間、円了は、当地の景勝、多くの名所・旧跡に接する機会を得る。珍しい事物・風物を見聞する。そして、訪問地の人々との交流・交際、あるいは交友を（心から）楽しんだ。講演が目的なら旅行（＝観光）は手段にすぎない。しかし、いつしか、手段は目的化、円了にとって、「観光」（行動）は巡講の最大の「楽しみ」（目的）となっていった（のではない）。

移動の最中、目にする風光明媚、当地の美しい景観が円了の心をとらえた。円了にとって、それは無量の「楽しみ」となり、巡講の原動力となった。巡講自体がパターン化してくるに伴い、講演の合間の、あるいは巡講過程の観光は、円了に新鮮な驚きと喜び、そして「楽しみ」をもたらすものとなった。かくして、巡講日誌は、いつしか紀行文の体裁をとるようになった。

「ひとはさまざまの理由から旅に上るであろう・・・人生がさまざまであるように、旅もさまざまである・・・すべての旅には旅としての共通の感情がある」。「共通の感情」とは、「日常生活から解放される嬉しさ」であり、そこには「漂泊の感情」、あるいは「旅の感傷」が伴う¹⁹⁾。

旅行も様々な苦痛や障害を伴うが、そこには心の自由がある。円了は自由を求めて旅に出た。紀行文（巡講日誌）に自由という言葉はないが、旅には日常生活から解放される自由がある。精神の緊張を解きほぐす効果もある。それが旅の「嬉しさ」であり、「楽しみ」となる。そこに超人的な巡講日程を嬉々としてこなしていった円了の観光行動の源泉があるのではないかと考える。旅の自由と哲学を愛する井上円了は `旅する哲学者、だった。

生涯官途に就かなかった円了は何よりも自由な生き方、自由な旅行をモットーとした。仮に官途に就いていたなら自由な旅行も自由な生き方もできなかったろう。巡講中、円了は、平生の日常生活から抜け出て、非日常の世界に遊ぶ人となる。漢詩「南船北馬」はそのような境涯を象徴する詩である²⁰⁾。

いうまでもなく、円了の紀行文（巡講日誌・旅行記）は膨大な量に上る。旅行中、円了が関心をもった事物・事柄も多岐に渡る。それらはいずれも円了の人と思想を知る上で多くの示唆を与えてくれる。本論で取り上げたものはその一部にすぎない。他にも興味ある多くの事例がある。それらの分析・考察は今後の課題としたい。

[注]

- 1)堀(2016c)参照。
- 2)岡本(2001)2～5頁、参照。
- 3)三浦(2016)461頁、参照。
- 4)本研究に際し、三浦節夫東洋大学教授のご教示をいただいた。ここに記して謝意を表する。
- 5)巡講の詳細については特に三浦(1998)443～499頁、三浦(2016)461～499頁を参照されたい。
- 6)堀(2017a)参照。
- 7)円了旅行記の特徴として当地の風景賛美がある。この点について筆者は円了の視力の良さを指摘したい。巡講中、円了は自分が目にする各地の風物・事物（景観美、月の形状等）を裸眼で仔細に観察、堪能・鑑賞していた。仮に視力が弱かったなら山紫水明や月を愛でる気持ちも半減していたのではないかと考えるからである。
- 8)以下は大正6年に円了の長男玄一に嫁いできた妻・信子の談話である。「一年のうちで父（井上円了）の在宅日数はほんの僅かで、ほとんど表の方が多いらしいんです。子供の頃、妹が『うちに変なのよ、お父様が家にいらっしゃると変な気がするのよ』とよく言っていました。私の結婚後もそうでした。一週間家にいましたらいい方でしょう。二、三日ですね。他の巡講が待っているんですね。よく電話がかかってきました。」井上信子「父井上円了」（『井上円了研究』第3号、昭和60年、75頁）、三浦(2016)494頁、参照。
- 9)『井上円了選集』からの引用は（ ）内の巻数・頁数で本文中に示す。なお上記引用に際し漢数字を算用数字に、現代かなづかいを旧かなづかいに直すなど一部表記を変えたところがある。
- 10)紀行文（巡講日誌）の概要については、巡講の日時、行程、訪問地、訪問者、宿所、事物・風物の印象、当地の所感等、主たる事項・事柄のみ抜粋・要約する形とするが、巡講の雰囲気や流れ、円了の心情が理解できるよう配慮した。なお訪問地の市長村名には『井上円了選集』に倣って（ ）を付して現在の市町村名を表示した（同一の場合は略）。
- 11)ちなみに前期巡講の出だしも神奈川県中郡（大磯町）だった。大磯に2泊した後、静岡に移り、静岡県の巡講を開始している。
- 12)巡講の時代は、鉄道の整備も進み、円了も鉄道を積極的に利用するようになった。実際、移動の中心は鉄道だった。当時あって円了はおそらく最大の鉄道利用者だろう。そもそも超人的ともいうべき円了の巡講は鉄道の利用がなければおよそ不可能だった。鉄道は円了の効率的な国内移動を可能にした最も重要な交通手段となった。移動方法はまず目的地にできるだけ速く効率的に到着する。その際、鉄道と汽船が拠点間直行の役割を果たした。鉄道には東京（新橋・上野）を起点として乗車、目的地（拠点駅）へ直行、降車し、そこを起点に各地の講演会場を（鉄道、汽船以外の）二次交通機関（馬車、人力車、小舟、徒歩）を用いて回った。三浦(1998)483～484頁、堀(2016c)21頁、参照。
- 13)ちなみに「館主巡回日記」は以下のような極めて事務的な書き出しで始まっていた。「明治二十

三年十一月二日（日曜） 晴れ。朝九時、新橋発車。大磯町教育会に出席し、教育上の講話をなせり」（12・11）。

14)円了の著作は非常におもしろいが、女性についての言及が極めて少ない嫌いがあるとの指摘がある。「元来、彼（＝井上円了）の文書や行動のどこをついても、『女性』が出てこない。少しはエロティシズムがほしいと思わずにはいられないほどストイックな彼のすべてに、筆者は少なからず味気ない思いをつづけてきた」平野(1974)347頁、引用。

15)隈本有尚は、明治35年10月25日、文部省視学官として哲学館の卒業試験の臨監に立ち会った。その際、彼が注視した一人の学生の倫理学の答案が、後に「哲学館事件」へと発展した。円了を相当程度苦しめた当該事件の最重要人物に4年足らずの間に会っているということに少なからず違和感を覚える。ただこの点は本論の趣旨と離れるので立ち入らない。哲学館事件の詳細については、三浦(2016)399～412頁を参照されたい。

16)紀行文はこのあと「満韓紀行」（明治39年10月28日から11月29日まで）に移るが、『井上円了選集』には収められていないため本論ではこれを省くこととした。ただ「満韓紀行」については、以下の論稿で言及した。堀(2016c)20～21頁。

17)沖縄県巡講をもとに書かれた「沖縄県紀行」に対して沖縄の新聞『琉球新報』が円了を批判する記事を掲載し、筆禍事件に発展した。この事件の詳細については佐藤(2016)を参照されたい。

18)巡講の訪問箇所、面会者は、教育関係（尋常小学校、高等小学校、中学校、工業学校、農業学校、商業学校、女学校、師範学校、市立女子興行学校、医学専門学校、看病婦学校、第三高等学校、第七高等学校、小学校長、中学校長、中学教員、工業学校長、女学校長、商業学校長、農業学校長、師範学校長、第七高等学校長、中学教員、教頭、視学、郡視学、県視学、文部省視学官、教育会、第三高等学校仏教青年会、第七高等学校仏教青年会など）、宗教関係（寺院、住職、仏教研究会、大谷派説教所、各宗同好会、仏教婦人会など）、行政関係（県知事、郡長、県事務官、県属、助役、県会議員、市長、裁判所長、郡書記、県庁事務官、税務監督局事務官、警察署長、控訴院長、監獄署、丸亀歩兵十二連隊など）が中心だが、三井物産会社取締役、新聞記者、医師といったように、実に様々な人々と分け隔てなく交際している。社交的な円了にとって巡講はやりがいがある「楽しい」仕事だった（にちがいない）。なお巡講の宿所は講演会場を兼ねた寺院が多かったが、個人宅、旅館にも泊まっている。

19)三木(1985)67頁、参照。

20)南船北馬

朝遊海角夕山巔、朝には海べに遊歴し、夕べには山のいただきに身を置くごとく、
北馬南船年又年、北に南にといそがしく旅をして年を重ねた。
漂泊如斯君勿怪、漂泊のような旅をあやしむことなかれ、
吾生猶未脱塵縁、わが人生はなおいまだ俗世との縁からぬけだせないのだから。

(12・192)

[参考文献]

- 井上円了記念学術センター編(1997)『井上円了選集』第12巻、東洋大学、1997年3月
- 井上円了記念学術センター編(1998)『井上円了選集』第15巻、東洋大学、1998年3月
- 岡本伸之編(2001)『観光学入門』有斐閣、2001年4月
- 佐藤厚(2016)「井上円了の沖縄巡講－巡講の内容と筆禍事件－」『井上円了センター年報』第24号、東洋大学井上円了研究センター、105～139頁、2016年3月
- 平野威馬雄(1974)『伝円了』草風社、1974年7月
- 藤井秀登(2014)『現代の観光事業論』税務経理協会、2014年7月
- 堀雅通(2016a)「旅行記にみる井上円了の観光行動」『国際井上円了研究』第4号、国際井上円了学会、2016年3月、112～113頁
- 堀雅通(2016b)「井上甫水著『漫遊記』にみる井上円了の観光行動について」『大学院紀要』第52集、東洋大学大学院国際地域学研究科、2016年3月、61～90頁
- 堀雅通(2016c)「旅行記にみる井上円了の観光行動と交通利用について」『観光学研究』第15号、東洋大学国際地域学部、2016年3月、11～38頁
- 堀雅通(2017a)「『館主巡回日記』にみる井上円了の観光行動」『大学院紀要』第53集、東洋大学大学院国際地域学研究科、2017年3月、75～102頁
- 堀雅通(2017b)「『坐ながら国を富ますの秘法』にみる井上円了の観光立国論」『観光学研究』第16号、東洋大学国際地域学部、2017年3月、19～44頁
- 三浦節夫(1998)「解説－井上円了の全国巡講」井上円了記念学術センター編(1998)『井上円了選集』第15巻、東洋大学、443～499頁、1998年3月
- 三浦節夫(2013)「井上円了の全国巡講データベース」『井上円了センター年報』第22号、東洋大学井上円了記念学術センター、2013年3月、37～160頁
- 三浦節夫(2014)『新潟県人物小伝 井上円了』新潟日報事業社、2014年5月
- 三浦節夫(2016)『井上円了一日本近代の先駆者の生涯と思想』教育評論社、2016年2月
- 三木清(1985)『人生論ノート』新潮社（新潮文庫）、1985年6月

Inoue Enryo's Tourist Activities as described in his Travel Diary "*South by Boat - North on Horse*' Collection -Vol. 1-

HORI, Masamichi

Abstract

During his eventful life, Inoue Enryo embarked on nation-wide lecture tours covering a total of 3,578 days, from which he published his travel diaries. These travel diaries were first included in the Philosophy Academy Lecture Transcripts and other works under the title *The Dean's Lecture Tour Diary*. After resigning from his university duties, he published the travel diaries as the fifteen-volume '*South by Boat - North on Horse*' Collection'. Contained in this work are travel diaries of Enryo's second set of lecture tours (2 April 1906 to 5 June 1919), which aimed to improve national morality and promote his Personal Cultivation Church Movement.

Further investigation into the above body of work revealed elements of tourism: "encountering," "learning," and "amusement." It could be said that one of the purposes of these lecture trips was to engage in tourism. This paper considers Enryo's tourist activities, analyzing the content of his trips based on his travel diaries. Some of the major findings of this paper include Inoue's interest in the scenery of places he visited, as well as his curiosity and passion for learning and encountering new people. Through his travels, he acquired a wide range of perspectives and developed comparative ways of thinking and viewing the world. This would influence his cultural comparisons, civilizational theories, and intellectual formation.

Keywords : Inoue Enryo, Nation-wide Lecture Tour, '*South by Boat - North on Horse*' Collection', Tourism, Tourist Activity